



Title	オリンピックにおける性別確認
Author(s)	永井, 孝志
Citation	現代化学. 2026, 662, p. 68-69
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/105797
rights	©2026 東京化学同人
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

基準値/をカガクする

第 88 回

オリンピックにおける性別確認

永井孝志

2026年2月に開催されたミラノ・コルティナ冬季オリンピックでは、スウェーデンのエリス・ルンドホルムが冬季オリンピック初のトランスジェンダー選手として、フリースタイルスキー女子モーグルに出場した。出生時の性別は女性だが、男性を自認している。そしてこの大会では、出生時の性別に基づいて女子選手として出場したのである。

物議をかもすのは出生時と異なる性別で、しかも元男性が女子選手として出場する場合だ。ニュージーランドのローレル・ハバード選手は、もともと男子選手として重量挙げ競技に出場していたが、2013年に性別を移行し、2021年に開催された東京オリンピックでは「女子」として出場した。2024年には、パリパラリンピックの女子200 mと400 mに、イタリアのパレンティナ・ベトリッロ選手が視覚障害のクラスで出場した。「彼女」も、もともとは男子競技で実績を残していたが、その後、トランスジェンダーであることを公表して女子種目に転向したのだ。また、同年のパリオリンピックでは、女子ボクシングで金メダルを獲得したアルジェリアのイマネ・ケリフ選手が、前年に行われた別の大会における性別検査では女子選手としての出場は

認められていなかったことから、性別論争が巻き起こった。

基準値をトピックとする本連載の第2回では、「女子選手の条件」として採用された「テストステロンルール」をめぐる問題の悩ましさを解説したい。

トランスジェンダーポリシー

国際オリンピック委員会（以下、IOC）は、2016年からトランスジェンダー選手の出場ルールを次の二つの条件とした。

- ① 性自認が女性であること
- ② テストステロン濃度が 10 nmol L^{-1} 以下であること（ただし競技前1年以上の維持が必要）

テストステロンとは男性ホルモンの一種で、女性の場合テストステロン濃度は $0.12 \sim 1.79 \text{ nmol L}^{-1}$ であるのに対し、思春期後の男性の場合は $7.7 \sim 29.4 \text{ nmol L}^{-1}$ であるとされ、男性の方が高い。2021年の東京オリンピックにおいて、重量挙げのハバード選手はこの基準をクリアしたために、女子選手としての出場権を得ることができたのだ。

しかし、連続的であるホルモンの濃度のどこで線引きするかは難しい問題である。それよりも性染色体（XY型は男性/XX型は女性）を使う方がはっ

きりしそうである。ただし、もともとオリンピックの性別確認は性染色体が使われていたのだが、それでは問題点が大きくなったため、テストステロンによる線引きに変更されたのだ。

性別確認の歩み

それではテストステロンルールができるまでの経緯を見ていこう（次ページの表参照）。陸上競技における性別の確認検査が始まったのは、1966年の欧州陸上選手権からだ。最初に用いられたその方法は、「目視検査」だった。すなわち、選手全員が全裸にされ、産婦人科医師の確認を受けるものである。だが、人権侵害との声が多かったために、すぐに撤回された。

その後「性染色体検査」が導入されたのだが、1964年の東京オリンピックにおいてメダルを一時剥奪されてその後返還されたエワ・クロボコフスカ（XX型とXXY型の遺伝的モザイク）のように、典型的に二つに分けられないケースも存在する。また、XY型であっても、先天的な性分化疾患の一つである完全型アンドロゲン不応症では、体つきが女性で性自認も女性である場合が多い。このような状態が染色体検査によってはじめて判明することもあり、しかもそれが公になることに

ついでの人権・プライバシーの問題もあった。特に、1988年にアンドロゲン不応症の選手に女子としての出場資格が与えられたところからこの検査についての限界が明らかとなり、2000年のシドニーオリンピックからは女子選手全員への検査はなくなった。ただし、疑いが生じたケースではやはり検査が行われることとなり、しかもその疑いとは外見が女性らしくないという差別的なものだった。

やはり代わりとなる検査が必要ということで、2012年のロンドンオリンピックからはテストステロンによる基準が登場した。これは「性別を決定する」というよりは、あくまで女子選手としての出場権に関するルール、という意味合いに変わっている。テストステロン 10 nmol L^{-1} という基準値は「女性と男性を分ける基準値」ではないのだ。なお、女子選手の性別確認のルールとトランスジェンダー選手の出場ルールは別物であり、2016年からのトランスジェンダーポリシーはこの数字を使い回したものであった。

ただしその後もテストステロンルールは混迷を極める。2013年にインドのデュティ・チャンドはテストステロン基準値超過のため女子選手として出場できなくなったが、この決定に対してスポーツ仲裁裁判所（CAS）に異議申立てを行った。2015年にCASは「人間の性は単純に二分できるものではない」、「テストステロンの数値が高い女性アスリートが実際に大きな優位性がある」としてテストステロンルールの一時停止の判決を出したのである。

揺らぐ出場資格のルール

こうして2016年のリオデジャネイ

表 オリンピック陸上競技における、選手の性別に関する出場資格の変遷

年	出来事
1966	欧州陸上選手権で目視身体検査が女子選手に必須化される
1967	性染色体検査による性別確認が導入される
2000	女子選手全員への検査が廃止され、疑いが生じた選手のみが検査の対象に
2012	女子選手の出場資格に「テストステロン 10 nmol L^{-1} 以下」が設定される
2015	CASがテストステロンルールの一時停止判決
2016	女子選手の性別確認が行われないままオリンピックが開催される トランスジェンダー選手の出場資格にはテストステロンルールが設定される
2017	国際陸連が一部競技で「テストステロン 5 nmol L^{-1} 以下」の出場資格を設定する
2024	競技ごとにさまざまな出場資格のルールが乱立

ロオリンピックは性別確認がないまま開催され、チャンドは女子として出場した。また、南アフリカ共和国のキャスター・セメンヤは女子800 mで金メダルを獲得したが、この女子800 mではセメンヤを含むメダリスト3人すべてが体内に精巢をもち、テストステロン値が男性レベルだったとのことで、また性別確認の議論が再燃してしまったのだ。

この後、2017年に国際陸上連盟はテストステロン濃度が高い女子は競技において有利であるとする調査結果を公表し、翌年テストステロン 5 nmol L^{-1} の基準値を導入した（400～1600 mの競技に限定）。この調査とは、2011年に韓国の大邱、2013年にロシアのモスクワで行われた世界陸上選手権大会に出場した2127人の選手のデータを分析したところ、テストステロン濃度の高いグループの方が統計的に有意に成績が上だったというものだ。ただし大邱の研究では、出場した女子選手（＝アスリートとしての能力が高いグループ）のテストステロン濃度の範囲は、通常の女性のテストステロン濃度の範囲とあまり変わらなかったという結果も出ており、基準値あるあるだがスッキリと線引きできるものではなさそうだ。セメンヤは同規定の無効を求めて

CASに訴えたが棄却され、2021年の東京オリンピックには出場できなかった。

IOCは東京オリンピック終了後に、トランスジェンダー選手の出場資格のルールは各競技団体が個別に設定することとし、テストステロンルールによる統一基準をなくした。しかしこれによって、2024年のパリオリンピック・パラリンピックでは競技ごとにさまざまなルールが乱立して、きわめて複雑なことになってしまった。なお、2025年に米国のトランプ大統領が、女性スポーツからトランスジェンダーを排除する大統領令に署名し、2028年のロサンゼルスオリンピックではトランスジェンダー選手が出場できる見込みは非常に低くなっている。

参考文献

1. 永井孝志, 村上道夫, 小野恭子, 岸本充生 著, 『世界は基準値できている——未知のリスクにどう向き合うか』, 講談社 (2025)。
2. ロイター, 「米五輪委員会, トランス選手的女子競技参加禁止に 大統領令受け」 (2025年7月23日)
3. 中央日報, 「トランスジェンダー, 今回の五輪が事実上最後の大会…性的少数者は44人以上出場」 (2026年2月4日)

本連載は、村上道夫（大阪大学）と永井孝志（農研機構）が執筆を担当する。